

# 俳句集

令和元年度 第十五回

亀山市民俳句会

（応募句 一般の部）

主催 亀山市・亀山俳句会



選者

宮田正和

石井いさお

上田佳久子

とき

令和元年十月二十六日(土)

ところ

亀山市文化会館 二階会議室

# 受賞俳句

## ≪一般≫

市長賞

黙もまた応へのひとつとろろ汁

市議会議長賞

新涼や音立てて開く新刊書

教育長賞

野分あとポプラもつとも輝く木

芸術文化協会会長賞

せみ生るるくしやくしやの羽ふるはせて

秀逸

夕映えや小柄差し終ふ菊師の背

風を抱く羽根の形や秋茜

松よりの風くる座敷新豆腐

露涼し維盛塚へ石踏んで

いつよりかお袋と呼ぶ帰省の子

小鳥来る葉叢に声を響かせて

照り降りの雲遊ばせて百日紅

佳

作

稲は花閉ぢて夕日の落ちゆきし

夕映えをまとふ葉先の蜻蛉かな

日ぼこりの匂ひの残る白日傘

思ふまま伸びて南瓜の花盛り

雑巾縫ふ大きな針目鰯雲

添水聴く法然院の雨しづか

大花火咲かさむと闇ひきしまる

# 応募俳句

1 強がりて寺の百段秋日和

あさがほや棚の奥より声のして  
遠花火闇の広がる川向こう

2 教室の窓に広がる青田波

真ん前を過る蝙蝠観音堂  
背伸びして息を大きく今朝の秋

3 野分雲ぎしと踏み込むペダルかな

チャイ押す指のかはきや風の盆  
夕映えや小柄差し終ふ菊師の背

4 耳元に蚊の鳴く音や平手打ち

全身で笑ふひ孫や風涼し  
蝸牛細枝づたいゆうるりと

秀

逸

教育長賞

5 ぎごちない虫の音やがて朗朗と  
収穫を祝う御褒美虹飾り  
そぞろ行く冷和の秋は三拍子

6 縁側にででむし五匹今朝も雨  
池渡る風ひと休み菖蒲園  
栄華知る多聞櫓に梅の雨

7 とつふりと暮れて鶏頭まだ酔へり  
野分あとポプラもつとも輝く木  
肩貸して身にしみじみと秋の蝶

8 元気よく畑に出向く夏の朝  
ちびちびと秋の夜長で酒をのむ  
我が心清められるよ秋の空

佳

作

9 蟬時雨消えて雨音残りけり

稲は花閉ぢて夕日の落ちゆきし  
若くして逝きたる妻の墓洗ふ

10 鎌上げて広葉の上の小かまきり

手折りきて佛に供ふ千日草  
雨蛙草に隠れて鳴きてをり

佳

作

11 夕映えをまとふ葉先の蜻蛉かな

弧を描く水がきらりと晩夏光  
玲瓏とコーラスの声文化祭

秀

逸

12 風を抱く羽根の形や秋茜

終戦日父は語らず鬼籍へと  
踏む足は木の根捉えて秋の山

佳

作

13 雑草のスクラム青きわが些庭

淋しきは肌に吸い込む秋の風  
支えなき心に添へるとろろ汁

14 青蛙小さき睨み返しけり

賄婦訛りの少し盆の宿

飛行雲今秋空をキャンバスに

15 秋鯖のずしりと旬の重さかな

日ぼこりの匂ひの残る白日傘  
七曜の始まる朝の笹子鳴く

16 久しぶり洗ふ硯の嵩

真つ直ぐに生きて来た身の鶏頭花  
紙面に載る体験談や終戦日



秀逸

17 窓ごしの雛見ている郵便夫

松よりの風くる座敷新豆腐  
置き忘る草刈鎌にりぼんかな

芸術文化協会会長賞

18 せみ生るるくしやくしやの羽ふるはせて  
オクラ採るひと日の伸びの実のかたち

19 鳩笛に耳傾けり山法師

墓参り拙い経や香揺らぐ  
冬支度暮らしあれこれ熱き茶を

20 涼風を真向に受く柚の家

透き通る少女の前歯夏鶯  
少年のTシャツ真赤夏の浜

21 暑き日や道どこまでもどこまでも

横たはる稲田の畦に立ちつくす  
夕明り稲のかをりと帰りけり

22 ダム背負ふ四・五戸今年の貝割菜

学校の靴箱の砂八月尽  
露涼し維盛塚へ石踏んで

23 犬逝くハイビスカスがデンと咲く

カボチャのツルのびるのびる大蛇のごとく  
暑い中ふわっとサギ草花開く

24 祖父の文字太し捏ね芋の出荷

今僕はアベベの走り秋の空  
夕映えのステンドグラス秋初め

秀

逸

25 人はみなまあるくなりて敬老日

いつよりかお袋と呼ぶ帰省の子  
ばらばらと来て発つは一斉稲雀

26 ヒグラシとアイスコーヒーペルセウス観る

暗闇に犬吠え閑宿の花火  
粉堞の壁落としたる台風雨

27 夕光や紙の音してばった翔つ

黙もまた応へのひとつとろろ汁  
予定なき午下の睡魔やいなびかり

市長賞

28 太陽がいっぱいトマト丸かぶり

ジェットコースター悲鳴に変わる天高し  
思ふまま伸びて南瓜の花盛り

佳作

佳

作

29 焼きそばの具材飛び散る夜店かな

農小屋の使わぬ農具虫時雨  
雑巾縫ふ大きな針目鰯雲

秀

逸

30 蝸や野川の径暮れ色に

小鳥来る葉叢に声を響かせて  
田舎家の窓にこつんと兎虫

31 新しき筆の走りや水引草

皿小鉢棚を整へ涼新  
バス降りし母許りの道曼珠沙華

32 帰り来て夫と昼餉の冷奴

虫の声吾れを誘へり日記閉づ  
帰燕いま伊勢に生まれし子を連れて

33 大 夕 立 一 級 河 川 水 狂 ふ

裏 木 戸 を 開 け て ち ち ろ の 闇 に 泛 く  
秋 の 蚊 に 肌 刺 す 力 残 り け り

34 牛 小 屋 に ち ち ろ の 潜 む 飼 葉 桶

流 木 の 溜 ま る ダ ム 湖 や 天 高 し  
も う 寝 る と 大 往 生 の 生 身 魂

秀 逸 35 照 り 降 り の 雲 遊 ば せ て 百 日 紅

夕 雲 は 飛 び 火 の や う や 曼 珠 沙 華  
鳳 仙 花 弾 け て ぼ く の 親 離 れ

市 議 会 議 長 賞 36 新 涼 や 音 立 て て 開 く 新 刊 書

コ ン バ イ ン の 機 嫌 良 好 豊 の 秋  
秋 暑 し 叩 き 落 し て 尻 の 泥

佳

作

37 芋の葉やばたばた遊ぶ象の耳

叱られて聞こえぬふりや水馬  
虫取り網の声かけあつて鬼やんま

38 登校の子らの挨拶柿に色

草ひばりさざなみ止まぬ山の湖  
添水聴く法然院の雨しづか

39 施餓鬼寺小さき椅子を引き寄せて

遮断機の続いて上がり鰯雲  
尺八の揺るる音色や盆の月

40 涼しきに今宵の虫や聞き分けて

我が生命四苦八苦して秋向ふ  
夫の身を介護録より秋の風

41 天牛のギューツと鳴きて日の暮れぬ  
久にみる空の青さよ七日月  
声にならぬ老母の笑まひ白露なる

42 鳳仙花庭に倒れし三輪車  
渡帯の尾灯眺める宵の月  
ランチにはミックスグリル紅葉狩

43 夏帽子くしゃくしゃにして通り雨  
親子猿案山子も知らぬ顔をして  
秋空や靴あべこべに三才児

44 小流れに朝の声のせ小鳥来る  
秋風に吊されてゐる棕櫚箒  
初恋の話さらりと衣被

佳

作

45 大花火咲かさむと闇ひきしまる

クレーンの揺れつつ伸ぶる炎暑かな  
子がしやがむ垣根やちちろ鳴き出して

46 青空に万雷響き秋祭り

風抜ける家の中にも秋の声  
迷走中今日は何処へのわきかな

47 ひさびさに友と語らふ鰯雲

秋祭り法被姿も様になり  
台風やアンダーパスを迂回して



